

国際研究集会を開くまで
— CASC 2009 開催までの道のり—
Holding International Scientific Meetings
— A Case of CASC 2009 —

(Invited talk)

長坂耕作

KOSAKU NAGASAKA*

神戸大学人間発達環境学研究科

GRADUATE SCHOOL OF HUMAN DEVELOPMENT AND ENVIRONMENT, KOBE UNIVERSITY

Abstract

数式処理分野は、国際研究集会で研究成果の発表や情報交換が行われることが多く、大学院生や若手研究者が最新の情報に触れる機会を増やすためにも、それらの研究集会を日本で開催することは重要である。しかしながら、国際研究集会を招致しそれを無事開催するには、運営に主体的に参加するスタッフだけでなく、コミュニティの多くの人の助けやスポンサー、そして何よりも多くの参加者が必要である。著者は、2009 年 9 月に組織委員会委員長として、国際研究集会「CASC 2009」を神戸大学で開催している。そこで、開催に至った経緯と運営の裏舞台を紹介することで、数式処理分野における日本での国際研究集会開催の参考となるよう、その舞台裏を報告するものである。

Abstract

There are several international workshops, symposiums and conferences in Symbolic and Algebraic Computation hence holding such meetings in Japan is important especially for graduate students and young researchers. In this report, for potential local organizers in Japan, we describe backstage administration works on CASC 2009 from my experience (on behalf of the chair of local organizing committee of CASC 2009).

*nagasaka@main.h.kobe-u.ac.jp